

PA-048

切迫早産妊婦の退院後の分娩に向けた体作りへの意識の変化

葛飾赤十字産院 看護部

○金井 早苗、江口 亜希子、鈴木 佳恵、鈴木 愛

1. 研究目的切迫早産入院は筋力低下につながり、早産への強い不安を伴う。退院後、早産域を脱しても切迫症状への不安が残り、分娩に気持ちが向かない場合がある。そこで、切迫早産入院を経験した妊婦の分娩に向けた体作りへの意識がどのように変化するかを明らかにする。2. 研究方法期間：2011年9月～2012年3月対象者：当院で出産した切迫早産入院既往のある褥婦方法：分娩記録より対象者を選定し1ヶ月健診時に研究依頼書を用いて説明と同意を得た。半構成的面接により調査した。面接内容を逐語録にし、質問項目に沿って整理した。3. 結果および考察 対象者は3名であった。面接内容を体を動かす抑制要因と促進要因の2つのカテゴリーに分類した。抑制要因は、筋力低下、周囲の影響、出産や陣痛への恐れ、正期産への憧れの4つ、促進要因は、清潔保持への思い、37週という安心、やりたい事ができる喜び、出産への焦りの4つに分類した。対象者は、37週まで妊娠継続したいという強い思いがあり、37週を境に体を動かす抑制と促進の要因に変化がみられた。37週までは清潔保持への思いからシャワーには入るが、抑制要因からずっと寝たきりの生活を続けていた。37週に入ると安心して、やりたい事ができる喜びから少しずつ簡単な家事を始めるが、筋力低下は感じたままであった。その後分娩に至らなかった対象者は、出産への焦りから体への負荷を増していくという変化がみられた。自宅と産院では環境が異なり、安静度のレベルを変えることは難しい。入院中からの筋力回復へつながるケアや、自宅環境を考慮した支援が必要である。また、出産や陣痛への恐れや正期産への憧れから37週まで床上安静を貫く妊婦の気持ちや行動特性を理解した上での関わりが大切である。

PB-100

新しい機能評価の受審とクオリティマネジメント

高槻赤十字病院 事務部 経営企画課長

○三上 貴政

【目的】全国のおよそ3割が取得している病院機能評価認定、今回新たな第3世代の評価基準として3rdG.ver.1.0が更新され、当院も3度目の更新をする事となった。近年医療制度改革の強力な推進によって医療機関のニーズは集約化され、それにより提供するサービスは多様化している。今回の評価指標変更によって医療機関の特性に合わせて機能種別の選択が可能となり、合わせて評価内容を重点化させ、ver6までの一問一答形式でなくより現場の実態に即した評価方法となっている。また5年に1度という品質確認は今回より3年後アウトカムの確認が取り入れられた。

【方法】3rdG.ver.1.0では評価4領域、88項目(当院)と旧形態より大幅に集約化され、サーベイ方法も大きく異なる為、現場の問題点の確認と把握、周知が体制を作る上での大きな課題となった。ようは何をしたら良いかわからない、そこで独自にver6と3rdG.ver.1.0の相関表の作成、解説集から1,000枚わたる確認表作成等、まずは今回の評価を理解する事から開始し、横断的な組織運営による問題の解決と相互理解を繰り返し、自院スタッフによるトータル36時間を超える模擬サーベイを行った。

【成績】問題点の把握と模擬サーベイにより88項目中81項目にA評価以上が付与され結果更新は成功した。

【結論】機能評価は付加価値であり通常運営に取り入れてできれば労力は最小限なのかもしれない。しかしいずれも誘発的なイベントになる医療機関が大半ではないか。今回を機にアウトカムのみでなく、拡張機能を持たせた、質とコンプライアンスの観点からクオリティマネジメントを取り入れる準備を行っている。

PA-049

育児支援外来開設の経緯と今後の課題

長野赤十字病院 看護部 産婦人科病棟

○唐沢 節子、金澤 雅美

1. はじめに A病院での産褥入院期間は、経膈分娩は4～5日、帝王切開分娩では67日である。A病院では、母乳育児を支援・推奨している。母乳育児は、母児の産後の経過に合わせ個別性に対応していくことが求められ、入院期間内では母乳栄養の確立が困難な褥婦もいる。そこで、平成25年12月に、退院後も母乳育児をはじめ育児の相談・支援ができる育児支援外来を開設した。導入までの経緯と現状、今後の課題についてまとめた。

2. 育児支援外来開設までの経緯入院中に母乳育児が確立されていない褥婦や新生児の生理的体重減少の回復が緩慢な場合は、退院後に病棟へ来院していた。10～20名/月ほどの褥婦が来院されていた。退院した褥婦の担当は、入院中の受け持ち助産師が中心に支援を無料で実施していた。授乳などの保健指導は、自由診療で料金請求ができる。病院経営の視点からも育児支援外来の日時・担当者・場所・料金・支援内容・必要物品・マニュアルを作成し、10月の保険診療委員会にて審議・検討し、開設の運びとなった。

3. 育児支援外来の現状と今後の課題 開設から4ヶ月が経過した。対象者からは「退院してからも病院へ来て、こうやって体重を測ってもらったり授乳を見てもらったりすると安心です。」とプラスの感想が多く聞かれた。来院者数は47名であった。(内訳 黄疸測定:2件/月合計8件 体重測定:4～19件/月合計41件 母乳・育児指導:3～16件/月合計30件) 育児支援外来は2回/週あるが、祝・祭日は行われていたため予備日を設ける必要がある。また、母乳指導は出来るだけ継続して担当者が関わられる体制作りも考えていく必要がある。核家族で少子高齢化の中での育児は不安や不明なことが多い。分娩した施設で継続的に育児支援ができる体制は、今後とも需要が高いと考える。

PB-101

旭川赤十字病院の「選ばれる病院」へのオンリーワンプロジェクト活動について

旭川赤十字病院 エクセレント・ホスピタル推進チーム

○松島 克典、平岡 康子、脇田 邦彦、青木 晋爾、田端 五月、久保田 裕子、矢田 幸政、藤田 浩二、児玉 真利子、藤田 豪紀

【はじめに】当院の中期計画に掲げられた「選ばれる病院となるための方策、魅力ある病院づくり」の実現のため、院長直轄の「エクセレント・ホスピタル推進チーム」を立ち上げ、職員満足度を高めることを重点においた「オンリーワンプロジェクト」活動を行っている。

【概要】本プロジェクトで掲げたテーマは「一人ひとりを大切にすること」である。一人ひとりとは「職員」と「患者」である。質の高い医療を提供し、患者・地域の病院・職員から選ばれる魅力ある病院になるためには、当院で働く職員がやりがいをもって働けることが重要であると考えている。

【活動】1. 院内で働く全ての職員が実践することで患者や職員同士のコミュニケーション向上を図ることを目的に「職員行動規範」を策定した。2. 職員が働きがいを持って職場環境を目指す、「職員意識調査」の実施と「職員アイデア提案システム」の構築を行った。3. 現場で抱える課題を直接院長にアピールできるように「院長を囲む会」を実施している。これらの活動方針や進行状況は院内報「ななかまど」の号外により適時、メッセージを発信して職員の理解と協力が得られるようにしている。プロジェクトを開始して1年が経過した。職員満足度向上には給与や福利厚生も重要ではあるが、やりがいのある職場環境づくりを目指すことが、对患者トラブルの減少や離職率の低下へつながり、その延長線上に患者満足度の充実があると考えている。今後も「一人ひとりに選ばれる病院」を目指して活動を続けていきたい。